

すずらん



特集！

自主製品を考える 第3回

地域活動センター すずらんの家の取組み

すずらんの家では15名の利用者の方たちがクッキーやケーキの製造、販売に励んでいます。現在は店舗がないため、お客様のご注文に応じて日々の作業を進めています。特に賞味期限の短いケーキは納品の当日に生地を仕込んで焼き上げます。当日の注文もできるだけ受けるようにしているので、作業計画がたびたび変更になってしまいます。また、予定通りに焼き上がらずに焼き直しになると対応のために仕事が追加になります。たとえば、人気のシフォンケーキが焼き上がり、型から取り出す時には緊張して息をのみます。陥没していないか、きれいにふくらんでいるか・・・。スポンジの状態によっては納品時間との戦いで焼き直すこともあります。受注販売は売れ残りを処分するという無駄は生じませんが、毎日がハプニングの連続です。計画的に製品を生産してその中からお客様に購入していただく体制ができれば日々の悩みから解放されるのでは・・・。その為には受注販売から店舗販売にしていきたいとの願いが台頭します。

しかし、現状の体制で店舗を構えるほどの生産ができるのか不安にもなります。利用者の方が主体となって、手作りのよさを生かしつつ生産力を上げていくために、さらに知恵と工夫が必要です。



おいしさがいろいろ
つまっています！

平成20年1月、現在の地より新磯野（相武台団地近く）に移転が決定しました。障害者自立支援法の多機能型事業所として新しい歩みを始めます。現在の作業スペースは手狭で安全面においても支障をきたしていましたが、移転後は環境整備によって作業効率が好転していくと思われます。新事業所が大通りに面している利点を生かし、カウンターでお客様に販売をして店舗実現への一歩にしていきたいと考えています。

利用者・職員共々に「笑顔の職人」をめざして、お客様に喜んでいただけるお菓子をお届けしていきたいと思っています。

（すずらんの家 見元）

障害者福祉制度が節操なく変わっていく流れの中で、重要な資源であり全ての基本である「人」に、将来にわたってどの位投資出来るのかをなかなか見極めることができません。その結果、人については後手に廻ることばかりで、何としても明日のために早くこの状態から抜け出さなければ頭を悩ませているのです。

少子高齢化が進む中で福祉職としての適切な人材の確保が益々難しくなってきています。これは福祉の分野に限った現象ではないのですが、元々福祉が人を相手にする仕事である割には待遇面に課題を抱えているので、福祉の仕事に情熱を注げないと言うのが昨今の若い人達の風潮ではないかと思います。施設利用者数に対して配置出来る職員数が制度上決められているので、それ以上に手厚い支援をしようとすると施設側の持ち出しになり経営を圧迫することになりますが、これを承知の上で適正な支援体制を維持していく為に、基準以上の職員を配置している事業所も少なくないのが現実です。福祉サービスを必要としている人達に質の高いサービスを提供したいと思う時、「良いシステム下で」が前提ですが、それ以上に「人に頼るところが大きいのです。障害のある人達と相対する職員には、尊敬される人間性と智力が求められます。が、それは言っても簡単なことではなく、障害者と一緒に職員も努力して行くしかないのではないかと思っています。

巻頭言

理事長 大長 義信

障害者地域活動センター「すずらんの家」及び 「タートル」の新体系事業移行

相模原市の単独事業（制度）の障害者地域活動センターとして運営してきました。「すずらんの家」と「タートル」は、統合移転して平成20年1月1日より、障害者自立支援法の多機能型事業所（「就労継続B型事業」及び「生活介護事業」）として運営することとしました。

「すずらんの家」が当法人の発祥の事業であることから、新しい事業所の名称は「すずらんの家」としました。旧すずらんの家は就労継続B型事業に、タートルは生活介護事業に移行します。

相武台団地近くの県道村富線沿いの4階建てビル1階部分を賃借して運営を開始しますが、地域に根ざした活動を達成するために、近隣住民の方々の理解と協力を得ながら運営していくかなければならないと思っています。

統合移転に当たっては、制度上の制約、収入面の不安、移行時の諸経費（敷金・改造費・他）、利用者の通勤等々解決しなければならない課題があったのですが、相模原市の適切な補助制度や利用者や保護者の方々のご協力を得て何とかクリアすることが出来ました。

実際に運営を開始してから、新体系事業移行の評価を受けるわけですが、及第点をいただけるよう、職員ともども努力していきたいと思いますので、新すずらんの家に温かなご支援をお願い致します。

（総合施設長 松屋）

全国障害者スポーツ大会 金メダル獲得！



10月13日（土）、秋田県立中央公園県営陸上競技場で、第7回全国障害者スポーツ大会「秋田わか杉大会」が開催され、全日程3日間、秋田県内7市町14競技（オープン競技を含む）で熱戦が行われました。グリーンハウス利用者の青山秀幸さんが、神奈川県選手団の一人として大会に参加しました。

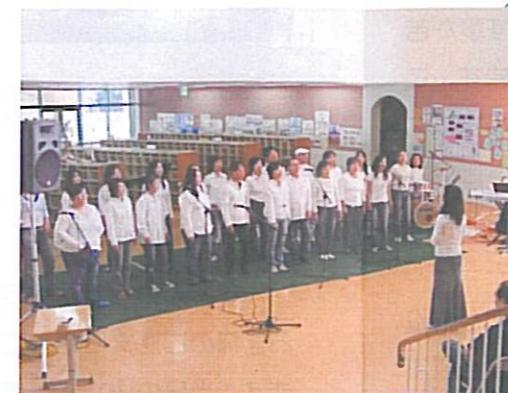
陸上競技800メートル、1,500メートル（年齢区分：壮年）に出場しました。800メートルでは2分13秒30、1,500メートルでは4分38秒90という成績！なんとどちらも大会新記録でみごと金メダルに輝きました。

（グリーンハウス 河合）



青山さん！ おめでとうございます！

サロンコンサート2007



ゴスペルクワイア
アンドフレンドの皆さん

これからも地域の皆様との交流の輪をさらに広げ、すずらんの会の活動をご理解いただけるイベントとして、サロンコンサートを開催していきます。

最後に、会場をお貸しいただいた富士見小学校の方々をはじめ、サロンコンサートにご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

（イベント委員会 佐久間）



デルタストリートの皆さん

共同募金会から寄贈いただきました

「ホームすずらん」内の3ヶ所のホームに、IHクッキングヒーター2台・洗濯機2台・衣類乾燥機2台が寄贈されました。これは、昨年12月に実施された「県共同募金会」配分金、「神奈川新聞歳末たすけあい」義援金により実現したもので、各ホームからは「調理が安全にできる」「変な音がしていた洗濯機が、やっと新しくなった」と喜びの声が上がっています。また、「ワークショップフレンド」にも配分金をいただき、作業倉庫と相談スペースを設置させていただきました。

共同募金会ならびに皆様からのお気持ちに感謝いたします。



ありがとうございました。



広げよう職員のわっ！

すずらんの会職員を紹介していく「広げよう職員のわっ！」の第7回。前回の斎藤さんが、すずらんの家の見元さんを紹介します。

すずらんの家のお菓子は本当に美味しいですよね！お菓子作りは繊細で緻密なものだと思いますが、見元さんの利用者さん一人一人への支援も、お菓子作り同様きめ細かくてとても丁寧です。利用者が誇りをもってお菓子作りに励んでいる姿に心を打たれるとともに、行き届いた支援があればこそ、私自身いつも学ぶ事が多いです。これからも美味しいお菓子を待っています！

（ワークショップ・フレンド 斎藤）

スワンベーカリーさがみはら店 あらたな販売活動にチャレンジ!



原当麻駅近くのスーパー三和原当麻店にご協力をいただき、12月から第1木曜日と第3木曜日に店内でパンの販売を行っています。

麻溝地区社協の理事の方に大きな後押しをいただき、店長さんのご理解の下、販売活動が行えることになりました。大きな店舗での販売は初めての取り組みなので、通常のイベント販売とは異なり少し緊張しましたが、徐々にお店の雰囲気に慣れ、皆、お客様に声をかけることが出来ました。

地域で皆様に愛されるパン屋を目指し、またご理解とご協力をいただいた方々へ感謝の気持ちを表すためにもがんばります！！

(スワンベーカリーさがみはら店 野中)



皆様のお越しをお待ちしています！

～ご寄付をいただきました～

土橋 規子様 力ヤバ工業労働組合様
この場をお借りいたしまして、感謝申し上げます。
ありがとうございました。

すずらんの会後援会では会員・賛助会員を募集しています

問合わせ先
〒228-0828 神奈川県相模原市麻溝台7-1-7
すずらんの会 グリーンハウス内
すずらんの会後援会 042-749-8881

編集後記

- ☆「自主製品を考える」も3回目となりました。それぞれがめまぐるしく変わる状況の中で、真剣に取り組んでいる様子を少しでもお伝えできたら幸いです。(S)
- ☆暖かなもの、温かなもの。なぜか心もなごみ、幸せを感じます♪(K)

すずらんの会通信講座

～感覚統合障害 PART 1～

1. 感覚統合とは？

今日、「落ち着きがない」「だらしがない」「不器用」「衝動的である」「自分の気持ちをことばで表す事が苦手」「キレやすい」子どもたちが注目されています。これらの状態は、本人の性格や努力不足、親のしつけの問題として扱われやすく、親子ともに自分自身に対する評価（自己有能感）が低くなりがちです。自己有能感が乏しい状態にあると、自分の心のエネルギーをコントロールできなくなってしまうため、思春期を乗り越える為には、一定レベル以上の自己有能感が必要です。ではなぜ、このような状態像が起こるのか？背景をいくつか考えてみましょう。

2. 感覚統合障害の背景

①「脳に流れ込んでくるさまざまな感覚情報を『交通整理する』脳の働き」にトラブルがあるため、このような状態像を示す子どもたちがいます。私たちが駅前などの雑踏の中でも、待ち合わせ相手を見つける事ができたり、沢山の話し声の中から相手の話し声を聞きわけるなど、必要な情報のみをキャッチできるのは、「視覚」や「聴覚」情報の交通整理がうまくいっているおかげです。この働きが不十分だと非常に雑然とした世界で生きてゆくことになり、大変な苦労を強いられます。

②脳が育つためにはその脳の発達段階にふさわしい感覚情報が不可欠です。昔はこのような感覚情報が子どもたちを取り囲む社会環境の中に自然に備わっていたのでしょうか、現在では子どもたちの生活・遊び環境に変化が生じ、体を通して学ぶ機会が減りました。これらの環境面の要因と、子ども自身の要因の相互作用により、感覚情報を栄養とする脳の育ちにつまずきが生じ、先に挙げた様な状態を生み出していることが考えられます。

(ばれっと 言語聴覚士 加藤)

～次号では、感覚統合障害へのアプローチなどをお伝えします～

*参考文献：木村順著「育てにくい子にはわけがある」大月書店
関心のある方は、ばれっとまでお問い合わせください。

